

平成 26 年度 学校経営計画及び学校評価

1 めざす学校像

- ☆知的障がいのある生徒が就労を通じた社会的自立をめざすチャレンジを支援する学校
☆個別の適性を正確に把握し、より適切で有効な支援を創造し進化する学校

たまがわ高等支援学校マネジメント3つの柱

○社会的責任（存在価値）

- ・学校は個人や社会に必要とされ存在し、個人や社会のニーズに応えるために存在する。知的障がいのある生徒の就労をめざすチャレンジを支援しその取り組みを広く社会に発信し、理解啓発に努める。

○マーケティング（顧客志向）

- ・2つの顧客（生徒と企業）のニーズを的確に把握し、適切で効果的なマッチングをおこなう。

○イノベーション（継続的な改善・改革）

- ・時代とともに早いサイクルで変化する社会において、多様な生徒の適性と企業が求めているものを常に把握し、素早く柔軟に支援体制を進化させることができるシステム。

2 中期的目標

1. たまがわ高等支援学校の存在価値とその使命意識の浸透

- (1) たまがわ高等支援学校の専門性の確立
支援教育の視点と職業教育のノウハウを融合させたキャリア教育の確立。（組織・チームとしての専門性）
- (2) たまがわ高等支援学校の使命
顧客（生徒と企業）のニーズを的確に把握し、適切で効果的なマッチングをおこなう。
- (3) たまがわ高等支援学校の社会的存在価値
本校の取り組み、実践が全ての障がいのある生徒のチャレンジを支援することにつながる。

2. より適切で効果的なマッチングを基本とした指導體制の確立＜顧客の創造＞

- (1) 生徒の特性の把握を軸（個別の教育支援計画・個別の指導計画の充実と活用）として、個別の課題を引き出し、適性を広げ、伸ばすことによりキャリアアップをめざす。
- (2) 制度の変化や時代の変化を敏感にとらえ、企業のニーズに応える人材を育成し、より適切で効果的なマッチングを行う。
- (3) 双方（生徒のニーズと企業のニーズ）の満足感を醸成することにより、定着率を上げるとともに、実習先、雇用先の新規開拓の広がりにつなげる。
- (4) たまがわ本校と4校の共生推進教室との進路指導の連携体制を構築する。

3. 時代とともに変化する生徒と企業のニーズに反応し柔軟に進化する集団

- (1) これまでの業務内容全般を見直し、スクラップ&ビルドの精神から非効率な業務の廃止や組織の再編を図り、効率的で機動力のある集団をめざす。
- (2) 開校以来構築してきた職業に関する専門学科をさらに進化させ、地域との連携を図りつつ、生徒が時代のニーズに応えるスキルを身につけるものとする。
- (3) 引き続き、卒業生の80%以上が就労できる体制を常にイノベーションを繰り返しながら機能させる。
- (4) 進化に対応できる若手人材の育成を図るため、積極的に責任職への登用を進める。

【学校教育自己診断の結果と分析・学校協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析 [平成 26 年 12 月実施分]	学校協議会からの意見
<p>保護者、生徒を対象に実施 【学校生活全般】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保護者・生徒共に授業については大変満足度が高く、教員の創意工夫された授業内容が評価されている。 ・「学校行事について」は生徒の88%が「楽しい」、「委員会や部活動について」は86%が「積極的に参加している」ということから、教科外教育活動についても満足度は高い。 ・保護者は「学級通信・連絡帳等を通して学校の教育内容を知ることができる」について、「思う」が96%と、非常に満足していただいている。 ・反面、「学校ホームページ」は39%が「見ない」と回答している。今後改善し、積極的に情報発信する必要がある。 <p>【生徒指導】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「先生に何でも相談できる」は23%が、「担任や保健室以外に相談できる教員がいる」は37%が「そう思わない」ということから、生徒がもう少し学校全体で相談できる体制をとって欲しいと考えている。教員間での情報共有をより一層細かく行うことが必要である。 ・「授業でわからなければ質問できる」については14%が「そう思わない」で、専門学科の授業を中心にテンポが速いのが原因と考えられる。T・Tの教員の意識を高め、個別に対応する必要がある。 <p>【交流関係】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「他校との交流を行っている」は、保護者の19%が「思わない」と回答している。共生推進教室のことについてあまり伝わっていないのではないかと考えられる。「地域の方々との交流をしている」については生徒の95%が、「思う」と回答している。次年度からの「たまがわランド」を見据えて分野等が積極的に校外での活動を行っている成果と考えられる。 	<p>第1回（7/11）</p> <ul style="list-style-type: none"> ○「たまがわランド」について ・10年目にふさわしい非常にいい取り組みだと考えるので、是非進めていただきたい。地域の立場としても後援会の立場としても協力する。 ○「業務内容全般の見直し」について ・スクラップというより、効率的に業務を見直し、イノベーションが今の企業の流れであるので、その観点で進めてほしい。 ・私の事業所も11時ころまでの残業が常態化していたが、今は7時退社が定着し、かつそれ以上の業績をあげている。 <p>第2回（12/1）</p> <ul style="list-style-type: none"> ○「たまがわランド」について ・しっかりと、他の施設等視察をして、話を聞いてきてください。キャラクターやたまがわブランド作りも大切である。 ○校時の変更について ・1校時を50分から45分にするのは授業内容が乏しくなってしまうが、その分しっかりと自立活動を行うことを確認する必要がある。 ○進路関係 ・連年通り順調に就労しているとのことだが、アフターフォローもしっかり願います。 <p>第3回（3/18）</p> <ul style="list-style-type: none"> ○就労後の定着について ・せっかく就労しても定着しないのは問題がある。アフターケアをしっかり行う必要がある。また、定着できるようなマッチングも必要である。数ではなく質の時代である。 ○入学者選抜について ・むらの高等支援や共生推進校でも定員割れがあった。たまがわも積極的に生徒や保護者、中学校にもっとPRしていく必要があるのではないかと。特に中学校とは今後も連携をしっかり取っていくべきである。

府立たまがわ高等支援学校

3 本年度の取組内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価
1 た ま が わ 高 等 支 援 学 校 の 存 在 価 値 と そ の 使 命 意 識 の 浸 透	(1) たまがわ高等支援学校の専門性の確立とたまがわ高等支援学校の使命 (2) たまがわ高等支援学校の社会的存在価値	ア. たまがわ高等支援学校のテーマパーク化「ソーシャルスキル」(就労のためのスキル)を習得するために3学科6分野それぞれの「テーマ」を基に各学科・分野が教育内容にマイナーチェンジを加える。 ア. 「とりかい高等支援学校」、本年度開校する「すながわ高等支援学校」と情報を共有しながら連携を強化する。 イ. 部活動等の交流を企画する。	ア. 各学科・分野が広報できる内容を再検討しHPに記載する。年度末にアンケート等を実施しチェンジの効果について問う。 ア. 教頭の情報交換会の内容を密にし、学校に持ち帰る。 イ. 定期戦・定期交流の計画を立てる。剣道部においては高体連加盟登録し、大会で1勝をめざす。	(1) ア、「たまがわランド」という事業を立ち上げ、各分野がそれぞれ備品を購入、新たにできることを創意工夫し、HPや学校見学会、オープンスクール等で外部の方々にお知らせをした。(○) (2) ア、連絡を密にし、特に入学者選抜関係については常に情報交換を密にした。3校の校長は定期的に会合をし、職業学科を設置する高等支援学校の校長部会・生徒指導部会等を立ち上げることを決めた。(◎) (2) イ、とりかい高等支援との交流戦は実現しなかった。3月には百人一首大会で交流する予定である。剣道部は1勝できなかったが5分間フルに戦った。(△)
2 よ り 適 切 で 効 果 的 な マ ッ チ ン グ を 基 本 と し た 指 導 体 制 の 確 立	(1) 個別の教育支援計画・個別の指導計画の充実と活用 (2) より適切で効果的なマッチングを行う。 (3) 雇用先の新規開拓の新たな広がりに取り組む。 (4) たまがわ本校と4校の共生推進教室の移行期をスムーズに進行する。	ア. 就労していく生徒がより有効に活用できる個別の教育支援計画にバージョンアップさせる。 ア. 生徒に習得させるスキルと企業が求めるスキルのマッチングを精査する。 ア. あらゆる場面において積極的に広報活動を行う。 イ. 連携機関を積極的に増やす活動を行う。 ア. 今後順次移行していく共生推進教室の円滑な教育活動を維持する。	ア. 様式については昨年度改訂した。今年度も引き続き丁寧に行う。 ア. 企業が求めるスキルを集約し情報を共有発信する。 ア. 年間10回以上の情報発信の場を設ける。 イ. 新たに参入する企業との連携を確立させる。 ア. 円滑な情報の引き継ぎ。	(1) ア、新様式については定着しており、またICT機器を有効利用して時間を削減できたことから計画策定に十分時間をかけ、より効果的に活用できるようになった。(○) (2) ア(3) ア・イ、今年の見学・視察の来校者数は43団体281人となり(3/16現在)、学校関係よりも企業の方々の来校が増えた。その機会に求人情報を収集し生徒のマッチングの際に参考とした。特例子会社の方々からも障がい者雇用を積極的に検討すると回答を得た。(◎) (4) ア、共生推進教室が新規に設置される金剛高校・緑風冠高校の担当者とリーディングスタッフが協議し生徒指導体制等で情報交換した。(◎) 二次募集の出願と卒業式が重なる可能性があり卒業式日程を変更したが、共生の生徒が高校の卒業式予行に出席できなくなるなど支障があった。(△)
3 時 代 と と も に 変 化 す る 生 徒 と 企 業 の ニ ー ズ に 反 応 し 柔 軟 に 進 化 す る 集 団	(1) スクラップ&ビルドの精神から非効率な業務の廃止や組織の再編を図り、効率的で機動力のある集団をめざす。 (2) 職業に関する専門学科が、地域との連携を図りつつ、時代のニーズに応えるスキルを身に付けるものとする。 (3) 引き続き、80%以上が就労できる体制を堅持する。 (4) 進化に対応できる若手人材の育成	ア. 昨年度、改編した校務分掌組織を新設した総務部と首席の協働によりさらに機能アップさせる。 イ. 統合ICTが本格稼働することから効率的な校務執行体制を構築する。 ア. 開校以来構築してきた職業科の授業内容を時代にマッチ、あるいは先取りするよう、教育内容にマイナーチェンジを加える。 ア. 実習先企業・雇用を検討いただける企業の新規開拓を全教職員で引き続き取り組む。 ア. 若手教員の育成と積極的登用により、フレキシブルな教員集団をめざす。	ア. 総務部と各分掌の協働による事業数。 イ. 分掌による業務の再点検し、それぞれ業務を10%削減する。 ア. 80%以上の維持。 ア. 中堅教員のミドルポストへの登用数を増やす。今年度の「イノベーション委員会」のポストに、中堅教員を3人程度登用することを目標とする。 イ. 創立10周年事業委員会を立ち上げる際、ベテラン・若手をバランスよく選任する。	(1) ア、総務部も含めて分掌を7から5に統合し、コンパクトで機動力のある集団を編成し、校務の見直しを進める。分掌の名称も変更する予定である。(○) (1) イ、職員会議時間の短縮・産業教育フェア不参加・個別の指導計画等様式統一などにより事務量を大幅に削減した。またICT機器を有効的に活用し、連絡等は極カメール等で行うなど校務の迅速化を進めた。(○) (2) ア、地域コミュニティ「たまがわランド」事業を開始、次年度は試行の年で、野菜の販売といった実現可能なプランを行うなど、各職業科のマイナーチェンジを全体として集約する予定である。(○) (3) ア、開拓は全教職員で170社あたり、新たに26社実習を受けていただいた。内定は3/16現在約95%である。(◎) (4) ア、イノベーション委員会に3人登用した。この委員会の業務は10周年記念行事の企画であるが、若手とベテラン教員が共同して非常に速いテンポで進んでいる。(○) (4) ア・イ、若手教員に校務運営への参画意識を持たせるため、新たに校内のプロジェクト(①学校パンフレット作成②多目的教室の設計・改修)を2つ立ち上げ、それぞれに5人程度若手人材を充て、スタートさせた。計10人のメンバーは非常に意欲的に業務に取り組んでいる。スタートが遅かったため結果が出るのは来年度になる。(△)